「静嘉堂文庫蔵運歩色葉集」と新写本

清水　登

運歩色葉集の、現在確認されている伝本は、数が少なく、(注1)古写本四種（『静嘉堂文庫蔵本』、『京都大学蔵元亀二年本』、『京都大学蔵天正十七年本』、『西来寺蔵天正十五年本』）と、江戸期末以後に転写されたとみられる新写本十三種である。

(注2)このうち、古写本四種について、その注文の逆算年数の表記から、「静嘉堂文庫蔵本」と「元亀二年本」とが最も古く、「天正十七年本」、「天正十五年本」はそれらに続くものであろうと、筆者は考えておいた。

また、逆算年数以外の注文にも伝本上の関係を示すものと思われる箇所があるので紹介しておく。

「拂子（ホッス）」という語の注文は次のように記載されている。

(静)　禅家説法之時持レ之ヲ

(元)　禅家説法之時持レ之

(十七)　禅家用之

(十五)　禅家用レ之

右の例は、「静嘉堂文庫蔵本」と「元亀二年本」と、「天正十七年本」と「天正十五年本」とのそれぞれの関係の深さを示すものであって、古写本四種の伝本上の関係を考える参考材料として付言しておく。

さて、新写本については、(注3)次のような川瀬一馬氏の指摘がある。

本書の傳本に就いては、上述の如く、松井簡治博士舊藏（静嘉堂文庫藏）の室町末期を降らぬ頃の寫本（二冊）と京都大學藏の元龜二年寫本（三冊）及び天正十七年寫本（下卷欠、合一冊。）水戸彰考館藏（寛永頃書寫、零本、一冊。）の天正十五年奥書本の四本が注意すべきものである。

傳本は比較的稀であるが、現存の江戸時代寫本は悉く松井博士藏本を基にする新しい傳寫本と言つてもよく、……

右の意味するところは、現存する江戸時代最末期の新写本の多くは、「静嘉堂文庫蔵本」のながれをくむものであるということである。

そこで、いくつかの新写本を披見する機会を得たので報告する。

(一)　伝本について

静嘉堂文庫蔵本　松井簡治博士旧蔵　乾坤二冊

巻首に「新井文庫」の朱印記を捺し、新井政毅旧蔵本である。川瀬一馬氏は、(注4)本書を「室町末期を降るまじき書寫本であつて、恐らく天文十六・七年の著作年代を去る遠からぬ頃のもの」と比定されている。

乾冊イーク、坤冊ヤースおよび巻末に魚名・鳥名・獣名・虫名・花木名・草花名・国尽・国の員数・方里の順で付録諸項を収めている。

現在の修綴には坤冊第九葉と第十葉とに前後が認められる。

また、草花名の坤冊第一一七葉は第一一九葉の後に入るべきものと思われる。先の第九葉、第十葉とともに現在の形態以前の本葉に乱れがあったものと思われる。

(注5)静嘉堂文庫長米山寅太郎氏は、本書の修綴について次のように指摘しておられる。

本書については従来、京都大学図書館蔵の三冊本と区別せられ、二冊本として世に紹介せられて来たが、仔細に検すれば、汚損、虫蝕、余白等から推して、本書も亦明らかにもと三冊本であり、乾冊の「与」部以下、坤冊の「天」の部までを

一冊として存したものが、後来改装の際に二冊に改められたと見るべきである。

国立公文書館・内閣文庫蔵本　温故堂文庫旧蔵　四冊

「温故堂文庫」の朱印記を捺し、江戸末期に塙家で「静嘉堂文庫蔵本」を転写したものとされている。

ただし、「静嘉堂文庫蔵本」で巻末に収められている国尽の類（国尽・国の員数・方里）が、本書では「カ」部末に移されている。

また、「静嘉堂文庫蔵本」における二箇所の乱丁はそのまま踏襲しており、さらに本書の二冊第五二葉と第五三葉とに前後が認められる。

国立公文書館・内閣文庫蔵本　太田全齋旧蔵　四冊

内閣文庫には、「温故堂文庫旧蔵本」とともに「静嘉堂文庫蔵本」と語の配列を同じくし、同書のながれをくむものと思われる「太田全齋旧蔵本」が所蔵されている。

本書の特色は、「静嘉堂文庫蔵本」において乱丁とみられる三冊第九葉と第十葉とが正しい順序に修綴されている点である。草花名の乱丁は同書の順序をそのまま踏襲しており、国尽の類は「カ」部末に収められている。

竹圓房本　西来寺蔵　四冊

「西来寺蔵」、「伊勢国西来寺」、「渡邊家山淵書倉印」の朱印記を捺す。各巻末には「渡邊氏」の朱印が捺され、旧蔵者を示すものであろうが、今のところ、その人物を特定することはできない。

また、各巻表紙には、（一巻）運歩色葉集元、（二巻）〔運歩色葉集〕名目抄、（三巻）〔運歩〕色葉〔集三〕、（四巻）〔運歩色葉集四〕名目集とある（〔　〕内は朱筆である）。

本書では、国尽の類が「カ」部末に収められ、内閣文庫蔵の二本と同様である。

また、三冊第九葉と第十葉とが前後していること、草花名の四冊第五八葉が前に位置しているなど、「静嘉堂文庫蔵本」の乱丁をそのまま踏襲している。

また、四冊第四五葉表は白紙のままになっている。

なお、本書および西来寺に所蔵されている「天正十五年本」は、西来寺三十一代住職、真阿宗淵（しんあしゅうえん）上人（房号・竹圓房、天明六――安政六）によって蒐集されたものであることを、現住職、色井秀譲師より御教示いただいた。

刈谷市立図書館蔵本　村上忠順旧蔵　四冊

「村上文庫」の蔵書印があって、村上忠順の旧蔵本であることがわかる。四冊巻末に朱筆で、

以塙本一校了　但年記ニ至テハ今按諸書ニ依テ訂之　嘉永五壬子年五月

とあって、本書は「温故堂文庫旧蔵本」を転写したものであるとされている。

そして、(注6)根上剛士氏は、本書朱筆の書き入れを旧蔵者の忠順自筆のものであろうとしている。さらに、「竹圓房本」において白紙のままであった四冊第四五葉表は、忠順自筆の書き入れによって加筆されている。

また、三冊第九葉と第十葉とが前後していることは、「静嘉堂文庫蔵本」と同様であって、第十葉表に「前丁ト入レカハル也」の書き込みがある。草花名の四冊第五八葉の乱丁も同書と同様である。

なお、二冊第一葉と第三葉とに「縫物（ヌイモノ）……類地（チ）」の一葉分を重複する。二冊第二葉表には「賀部　鎌倉注至天文十六丁未四百卅八季」とだけある。

また、国尽の類が本書では「ク」部末に移されている。

(二)　伝本にみる国尽の類の位置について

新写本四種の乱丁部分を概観するかぎり、各本とも「静嘉堂文庫蔵本」のながれをくむものであることは確かである。

ただ、国尽の類の位置に相違がある。これは何を意味するのであろうか。

古写本四種を含めて各本の体裁とそれぞれの国尽の類の位置を示すと、次の表Aのようになる。

表A

伝本	体裁				冊数	国尽の類の位置
静嘉堂本	イーク	ヤース			二冊	巻末
元亀二年本	イーカ	ヨーテ	アース		三冊	カ部末
天正十七年本	イーカ	ヨーテ	欠		一冊	カ部末
天正十五年本	イーカ	欠			一冊	カ部末
温故堂旧蔵本	イーリ	ヌーク	ヤーユ	メース	四冊	カ部末
太田全齋旧蔵本	イーリ	ヌーク	ヤーユ	メース	四冊	カ部末
竹圓房本	イーリ	ヌーク	ヤーユ	メース	四冊	カ部末
刈谷図書館本	イーリ	ヌーク	ヤーユ	メース	四冊	ク部末

古写本の体裁は、三冊本と思われる本が多く、それが本来の姿ではなかったかと思われる。前述したように、「静嘉堂文庫蔵本」について同書が三冊本であったとする米山氏の指摘もある。

国尽の類の位置については、「静嘉堂文庫蔵本」を除き、他の古写本ではともに一冊末（『カ』部末）に位置しているのである。

一冊末にしても巻末にしても付録諸項の掲載位置としてはふさわしいものと考えられる。

「静嘉堂文庫蔵本」も当初「カ」部末にあったものが改装の際に巻末に国尽の類を移したのかもしれない。

したがって、「刈谷市立図書館蔵本」の国尽の類の位置（『ク』部末・二冊末）の変更は、三冊より四冊に分綴されたことによる措置と考えられる。

また、「温故堂文庫旧蔵本」、「太田全齋旧蔵本」、「竹圓房本」の国尽の類が、三冊より四冊に分綴されながらも「カ」部末に位置しているのは、古写本における三冊本の痕跡を残しているものと考えられる。

「刈谷市立図書館蔵本」の国尽の類の位置について、(注7)川瀬氏の次のような指摘がある。

この本は塙本と本文が一致するが、同本でか部の末（第一冊末(注8)）にある國盡をク部の末（第二冊末）に添へてある。これは書寫の除(ママ)に任意に改變したものであらう。クの部の末にあるのは國盡の意に解したものと思はれる。（か部は東海道以下海道の意である。）

(三) 「静嘉堂文庫蔵本」と新写本との概観

前章において明らかなことは、国尽の類が「ク」部末に配されている「刈谷市立図書館蔵本」は他の新写本に比して新しいものではないかということのみである。今のところ、その他の新写本についての実態は明らかにされていない。

そこで、本章では「静嘉堂文庫蔵本」と新写本との関係を概観してみようと思う。

まず、各本（『静嘉堂文庫蔵本』・『温故堂文庫旧蔵本』・『竹圓房本』・『刈谷市立図書館蔵本』）の校異表を作ってみることにした。各本の本文（国尽は除く）の一致箇所、相違箇所の関係を数字化したものが次の表Bである。

なお、相違箇所については、文字の相違によるもの、脱落・増加によるものとを区別して示してある。調査対象は本文のみとし、書き入れと思われるものは省いた。

表B

脱増	文字		各本との関係			脱増	文字
74	139	A	静と温と竹とが一致する（刈と他本と相違する）				
0	3	B	静と竹と刈とが一致する（温と他本と相違する）				
2	13	C	静と温と刈とが一致する（竹と他本と相違する）				
160	62	D	温と竹と刈とが一致する（静と他本と相違する）				
60	159	E	静と温と一致し，竹と刈と一致する	E′	静と温と一致し，竹と刈と相違する	5	37
1	2	F	静と竹と一致し，温と刈と一致する	F′	静と竹と一致し，温と刈と相違する	0	3
0	0	G	静と刈と一致し，温と竹と一致する	G′	静と刈と一致し，温と竹と相違する	0	0
				H′	温と竹と一致し，静と刈と相違する	0	13
				I′	温と刈と一致し，静と竹と相違する	2	5
				J′	竹と刈と一致し，静と温と相違する	0	7

表の中の数字からいくつかのことが指摘できるように思う。

(A) 古写本の「静嘉堂文庫蔵本」と新写本の間には語句の関係で隔たりがあるようである。

(B) 新写本のうち、「刈谷市立図書館蔵本」は、「温故堂文庫旧蔵本」と「竹圓房本」との親密な関係に比べ、隔たりがあるようである。

(C) 新写本のうち、「温故堂文庫旧蔵本」は、新写本の共通祖本と考えられる「静嘉堂文庫蔵本」と親密な関係にあるようである。

(D) 「静嘉堂文庫蔵本」と「刈谷市立図書館蔵本」とは、伝本上の交渉は伺えず、つねに「刈谷市立図書館蔵本」は、新写本

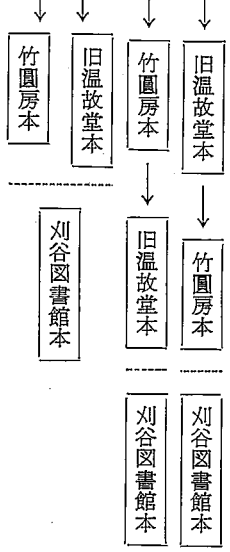
として「温故堂文庫旧蔵本」ならびに「竹圓房本」の影響下にあるもののようである。

(ㄹ)「静嘉堂文庫蔵本」が「温故堂文庫旧蔵本」と親密な関係にあるのと同様に、「竹圓房本」と「刈谷市立図書館蔵本」とは親密な関係にあるもののようである。

(四)　古写本から新写本への転写過程について

古写本の「静嘉堂文庫蔵本」より新写本に転写される過程を、四本の運歩色葉集を使い、推定してみようと思う。

まず、「静嘉堂文庫蔵本」より三本の新写本に転写される道筋について仮説をたててみる。考えられる仮説は次の通りである。



なお、「刈谷市立図書館蔵本」は、「静嘉堂文庫蔵本」と直接の交渉をもったものとは考えにくいため、この場面では保留しておくことにする。

それでは、仮説Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを検証するのに関係のあると思われる例を次に掲げる。

(イ)「静嘉堂文庫蔵本」と「温故堂文庫旧蔵本」とに関わる例

(a)　静嘉堂本と旧温故堂本とが一致し、他本と一致しない例（校異表のE、E′に該当する）

①
一言（ケン）（静）
一言（ケン）（温）
一記（コン）（竹）
一記（刈）

②
日参（静）
日参（温）
日尽（竹）
日尽（刈）

③
本主（静）
本主（温）
本至（竹）
本至（刈）

④
犯肉（ニウ）（静）
犯肉（ニウ）（温）
犯用（ヨウ）（竹）
犯用（刈）

⑤
平泉寺（静）
平泉寺（温）
早泉寺（竹）
早泉寺（刈）

⑥
鎌倉（カマクラ）鳥羽院保安元庚子立
至天文十六丁未四百廿八季（静）
鎌倉（カマクラ）鳥羽院保安元庚子立
至天文十六丁未四百廿八年（温）
鎌倉鳥羽院保安元庚子立
至天文十六丁未四百卅八季（竹）
鎌倉（カマクラ）鳥羽院保安元庚子立
至天文十六丁未四百卅八季（刈）

⑦
襤褸　桓武延暦五丙刀死至天文十七戊申
日本七百六十三季也（静）
襤褸　桓武延暦五丙刀死至天文十七戊申
日本七百六十三年也（温）
襤褸　桓武延暦五丙刀死至天文十七戊申
日本七百六十二年也（竹）
襤褸　桓武延暦五丙刀死至天文十七戊申
日本七百六十二年也（刈）

⑧
楊貴妃　唐玄宗
帝之女（静）
楊貴妃　唐玄宗
帝之女（温）
楊貴妃　唐玄宗
帝妾（竹）
楊貴妃　唐玄宗
帝妾（刈）

⑨
魚箸……箸与刀表ニス金剛界
胎蔵界両部也（静）
魚箸……箸与刀表ニス金剛界
胎蔵界両部也（温）
魚箸……者与刀表ニス金剛界
胎蔵界両部也（竹）
魚箸……者与刀表ニス金剛界
胎蔵界両部也（刈）

⑩
召夫（フ）（静）
（召）夫（温）
（召）矢（竹）
（召）矢（刈）

⑪
悉達太子（シッダタイシ）佛（静）
悉達太子佛（温）
悉達太子佛（竹）
悉達太子佛（刈）

⑫
日吉祭（ヒヨシマツリ）毎月四月中ノ
申日也（静）
日吉祭毎月四月中ノ
申ノ日也（温）
日吉祭毎月四日中ノ
申ノ日也（竹）
日吉祭毎月四日中ノ
申ノ日也（刈）

⑬
百官（クワン）（静）
百官（温）
百宮（竹）
百宮（刈）

⑭
一聯同一条禅閤
書之（静）
一聯同一条禅閤
書之（温）
一聯自一条禅閤
書之（竹）
一聯白一条禅閤
書之（刈）

(b)　静嘉堂本と旧温故堂本とが一致しない例（竹圓房本とともに相違する場合を除く。校異表のB、F、F′I′、J′に該当し、F、F′を除き全例を掲げる）

⑮
半漁馬（静）
半漁馬之（温）
半漁馬又（竹）
半漁馬又（刈）

⑯
石塔寺（イシタウシ）州江寛弘三年丙午立至天文十六丁未六百四十一年也（静）
石塔寺（イシタウシ）州江寛弘三年丙午立至天文十六丁未六百四十七年也（温）
石塔寺（イシタウシ）江州寛弘三年丙午立至天文十六丁未六百四十一年也（竹）
石塔寺江州寛弘三年丙午立至天文十六丁未六百四十一年也（刈）

⑰
解倒懸（カイタウケン）……至天文十六季丁未八百五十年也（静）
解倒懸（トウトウケン）……至天文十六季丁未八百二十年也（温）
解倒懸（カイトウケン）……至天文十六季丁未八百五十年也（竹）
解倒懸（カイタウケン）……至天文十六季丁未八百五十年也（刈）

⑱
高野（タカノ）嵯峨天皇弘仁七丙申七月八日弘法四十六歳（静）
高野（タカノ）嵯峨天皇弘仁七丙申七月八日弘法四十六歳（温）
高野（タカノ）嵯峨天皇弘仁七丙申七月八日弘法四十六歳（竹）
高野嵯峨天皇弘仁七丙申七月八日弘法四十六歳而立至天文十七季戊申七百卅一季也（刈）

⑲
太子賓客（ヒンカク）同上（静）
太子賓客（ヒンカク）同三（温）
太子賓客同（竹）
太子賓客（ヒンカク）同三（刈）

⑳
国弘一条院御宇刀工也相模国人（静）
国弘一条院御宇刀土也相模国人（温）
国弘一条院御宇刀ユ也相模国人（竹）
国弘一条院御宇刀土也相模国人（刈）

㉑
水巻矢（静）
水巻ハ（温）
水巻又（竹）
水巻又（刈）

㉒
華（クヮ）（静）
華（クヮ）力（温）
華（クヮ）茎力（竹）
華力（刈）

㉓
競馬（ケイバ）……文武慶雲三丙午……（静）
競馬……文武慶雲三丙午……（温）
競馬……天武慶雲三丙午……（竹）
競馬……文武慶雲三丙午……（刈）

㉔
合（フサグ）一目（静）
合（フサグ）一口（温）
合（フサグ）（竹）
合（フサグ）一口（刈）

㉕
傳教（デンケウ）大師越前北庄舟守子慶雲元丁未生至天文十七戊申八百四十五季也嵯峨弘仁十三壬子刀六月四日入滅五十歳也至天文十七戊申七百八十七季也（静）
傳教大師越前北庄舟守子慶雲元丁未生嵯峨弘仁十三壬子六月四日入滅五十歳也至天文十七戊申七百八十七年也（温）
傳教大師越前北庄舟守子慶雲元丁未生嵯峨弘仁十三壬子六月四日入滅十歳也至天文十七戊申七百八十七年也（竹）
傳教大師越前北庄舟守子慶雲元丁未生嵯峨弘仁十三壬子六月四日入滅五十歳也矣天文十七戊申七百八十七年也（刈）

㉖
相姓木姓火姓土金姓水水姓木（静）
（相）姓木姓火火—土金—水火—木土—金（温）
（相）姓木姓火火—土土—金金—水水—木（竹）
（相）姓木姓火火—土金—水火—木土—金（刈）

㉗
木丸（ヤンワル）殿（静）
木凡殿（温）
木九殿（竹）
木凡殿（刈）

㉘
新后撰集　后二条院喜元癸卯被撰之　至天文十七戊申百九十六季也　（静）
新后撰集　后二条院喜元癸卯被撰之　二百九十六年　（温）
新后撰集　后二条院喜元癸卯被撰之　百九十六年　（竹）
新后撰集　后二条院喜元癸卯被撰之　百九十六年　（刈）

㉙
生気方　東　双刀　戊亥　辰巳　末申　方　方　方　方　此其歳當方　此掛人如此　（静）
生気方　東　双子　戊亥　戊酉　亥　方　辰巳　末申南　此其歳當方　此掛人如此　（温）
生気方　東　双子　戊亥　戊亥　辰巳　末申　南　此貫歳當方　此掛人如此　（竹）
生気方　東　双午　戊亥　戊亥　辰巳　末申　南　此貫歳當方　此掛人如此　（刈）

㉚
諸子又唯背腸一桶　（静）
諸子　背腸一桶　（温）
諸子　背腸　（竹）
諸子　背腸　（刈）

㉛
木綿着鳥鷄之事　（静）
木掃着鳥鷄　（温）
木槲巻鳥鷄　（竹）
木槲巻鳥鷄　（刈）

(ロ)「静嘉堂文庫蔵本」と「竹圓房本」とに関わる例

(a) 静嘉堂本と竹圓房本とが一致し、他本と一致しない例（校異表のF、F′に該当し、全例を掲げる）

㉜
萬ヒ（静）
萬（温）
萬々（竹）
萬（刈）

㉝
北闕禁裡也（静）
北闕禁裡也（温）
北闕禁裡也（竹）
北闕禁程也（刈）

㉞
堙レ堀史ヲ遯レ山ヲ―レ―（静）
堙レ堀定ヲ遯レ山ヲ―レ―（温）
堙レ堀ヲ遯レ山ヲ―レ―（竹）
堙レ堀夫ヲ遯レ山―レ―（刈）

㉟
帆レ風――左傳十一渥使不差輕（静）
帆レ風――左傳十一渥使不差輕（温）
帆風――左傳十一渥使不差輕（竹）
帆レ風――左傳十一渥使不差輕（刈）

㊱
空也上人也至天文十七戊申百四十七季　円融院天禄三季壬申入滅六十歳（静）
空也上人也至天文十七戊申百四十七季　円融院文禄三季壬申入滅六十歳（温）
空也上人也至天文十七戊申百四十七季　円融院天禄三季壬申入滅十六歳（竹）
空也上人也至天文十七戊申百四十七季　円融院天禄三季壬申入滅六十歳（刈）

㊲
雑紙（静）
雑（温）
雑紙（竹）
雑（刈）

(b) 静嘉堂本と竹圓房本とが一致しない例（旧温故堂本とともに相違する場合を除く。校異表のC、E、E′、I′、J′に該当し、E、E′、I′、J′は前掲してあるので省略する。Cは全例を掲げる）

㊳
雲胎俗用之（静）
雲胎俗用之（温）
雲胎俗田之（竹）
雲胎俗用之（刈）

㊴
七生（静）
七生（温）
土生（竹）
七生（刈）

㊵
陰陽頭大卜博士唐名祠部大史令（静）
陰陽頭大卜博士唐名祠部大史令（温）
陰陽頭大卜博士唐名桐部大史令（竹）
陰陽頭大卜博士唐名祠部大史令（刈）

㊶
面足尊陽神也天文七代之内第六代也（静）
面足尊陽神也天文七代之内第六代也（温）
面足尊陽神也天神七代之内第六代也（竹）
面足尊陽神也天文七代之内第六代也（刈）

㊷
家醸ニ依酒名（静）
家醸ニ依酒名（温）
家醸予依酒名（竹）
家醸ニ依酒名（刈）

㊸
大般若……至天文十七戊申　八百十四季也（静）
大般若……至天文十七戊申　八百十四年也（温）
大般若……至天文十七戊申（竹）〔此已下恐落文本ノママ也〕
大般若……至天文十七戊申　八百十四年也（刈）

㊹
濫觴始之義也山谷殿岷江始入楚乃チ無底（静）
濫觴始之義也山谷殿岷江始入楚乃チ無底（温）
濫觴始之義也山名殿岷江始入楚乃チ無底（竹）
濫觴始之義也山谷殿岷江始入楚乃チ無底（刈）

㊺
摩醯修羅天知二両降數ヲ（静）
摩醯修羅天知両降數（温）
摩醯修羅天知雨降致（竹）
摩醯修羅天知両降致（刈）

㊻
琴……豕三一季三百六十日…（静）
琴……象二一年三百六十日一…（温）
琴……象三年三百六十日……（竹）
琴……象二一年三百六十日…（刈）

㊼
徹　底（静）
（徹）底（温）
（徹）（竹）
（徹）底（刈）

㊽
都……至天文十七戊申　八百八十二季也（静）
都……至天文十七戊申　八百八十二年也（温）
都……天文十七戊申　八百九十二年也（竹）
都……至天文十七戊申　八百八十二年也（刈）

㊾
巨文星馬叉丑歳槐亥歳（静）
巨文星馬叉丑歳槐亥歳（温）
巨文星馬叉丑歳亥歳（竹）
巨文星馬叉丑歳槐亥歳（刈）

㊿
善導和尚天智天皇白鳳廿二壬午入滅至天文十七季戊申八百六十七季（静）
善導和尚天智天皇白鳳廿二壬午入滅至天文十七八百六十七年（温）
善導和尚天智天皇白鳳十二壬午入滅至天文八百六十七年（竹）
善導和尚天智天皇白鳳廿二壬午入滅至天文十七八百六十七年（刈）

(51)
下蛶（クヲク）上蚋（カウヒ）（静）
下蛶（クヲク）上蚋（カウヒ）（温）
蚋（ツヒク）蛶（カウヒ）（竹）
下蛶（クヲク）上蚋（カウヒ）（刈）

(52)
銕緑花（ロククワ）（静）
銕緑花（温）
銕線花（竹）
銕緑花（刈）

(ハ) 仮説①、②、③についての検討

まず、仮説③について考えてみよう。仮説③は、「温故堂文庫旧蔵本」および「竹圓房本」を、「静嘉堂文庫蔵本」よりの転写本と考えたものである。しかし、本説を解するのに障害になる次のような例がある。

(53)
新續古今集后花園永亭十午被撰之至天文十七戊申百十一季也（静）
新続古今集后花園永亭十戊午被撰之百十一年（温）
新続古今集后花園永亭十戊午被撰之百十一年（竹）
新続古今集后花園永亭十戊午被撰之百十一年（刈）

(54)
十哲（テツ）徳行顔淵閔子騫冉伯牛仲弓言語宰我子貢政事井者季路文学子游子夏已上孔門三千人弟子其内粋者也（静）
十哲顔淵閔子騫冉伯牛仲弓宰我子貢冉有季路子游子夏孔門三千人弟子其内粋者也（温）
十哲顔淵閔子再伯牛仲弓宰我子貢再有季路子游子夏孔門三千人弟子其内枠者也（竹）
十哲顔淵閔子冥冉伯牛仲弓宰我子貢冉有季路子游子夏孔門三千人弟子之内其内粋者也（刈）

右の例は、「静嘉堂文庫蔵本」の「新続古今集」、「十哲」の注文を新写本の三本が同じ箇所をともに欠いているのである。これは新写本の三本が同系統の転写本であることを示すものであって、「温故堂文庫旧蔵本」、「竹圓房本」が「静嘉堂文庫蔵本」を祖本として別々に転写したものとは考えにくい。

このようにして仮説②はどうであろうか。仮説②は、「静嘉堂文庫蔵本」を祖本として「竹圓房本」が転写し、それをもって「温故堂文庫旧蔵本」が転写したものと考えたものである。

この説に対する矛盾点として次の二つが指摘できる。

1、校異表の数字より、「温故堂文庫旧蔵本」は「静嘉堂文庫蔵本」に近く、「竹圓房本」は「刈谷市立図書館蔵本」に近いものと考えた。

2、「竹圓房本」の四冊第四五葉表は白紙のままであり、その他「四句偈」、「摺鼓」、「泗州」の注文を欠いている。

また、用例㊸の「大般若」は、「竹圓房本」のみが逆算年代「八百十四年」を欠いており、「此已下恐落文　本ノマヽ也」の書き入れがある。

右の二つの事実によって「竹圓房本」をもって「温故堂文庫旧蔵本」が転写したとする仮説Ⅱは受け入れがたいものとなる。

次に仮説Ⅰについて検討してみよう。仮説Ⅰは、「静嘉堂文庫蔵本」を祖本として「温故堂文庫旧蔵本」が転写し、次にそれを「竹圓房本」が転写したものと考えたものである。

本説にしたがうと、先述した仮説Ⅱに対する二つの矛盾は解決される。

しかし、本説の、「温故堂文庫旧蔵本」を「竹圓房本」が転写したとする考え方にしたがうものとすれば次のような矛盾が生ずる。

1、「温故堂文庫旧蔵本」と「竹圓房本」とが相違する箇所として校異表のB、C、E、E′、F、F′、I′、J′が該当し、総数299に達する。それは転写の際の誤写として多すぎる。

2、校異表B、F、F′（用例⑯、⑰、⑱、㉜～㊲）は、「竹圓房本」が「静嘉堂文庫蔵本」を踏襲しているのに対し、「温故堂文庫旧蔵本」においては「静嘉堂文庫蔵本」と相違しているのである。このような事実は、「温故堂文庫旧蔵本」を「竹圓房本」が転写したとする仮説Ⅰに矛盾する。

以上、仮説Ⅰ、Ⅱ、Ⅲはすべて受け入れがたいものとなる。

それでは、転写の過程としてどのように考えたらよいのであろうか。仮説を考えるにあたって次のような条件をたてることができる。

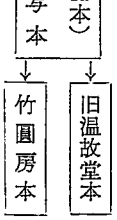
（条件）

一、「温故堂文庫旧蔵本」と「竹圓房本」とは「静嘉堂文庫蔵本」の転写本として同系統のものである。

二、「温故堂文庫旧蔵本」と「竹圓房本」との本文には差異があって、それぞれに祖本と思われる「静嘉堂文庫蔵本」の痕跡を有している。

以上の二つの条件を充たす仮説として次のようなものを考えてみた。

Ⓝ



右の図は、「静嘉堂文庫蔵本」と「温故堂文庫旧蔵本」、「竹圓房本」との間に転写本（A本）を想定したものである。想定本を介在させることによって条件二つが充たされるのである。

仮説Ⓝの欠点は、未発見本を介在させるところにあるが、各本の事実を見比べた場合、蓋然性の高い説と思われる。

㊐　「刈谷市立図書館蔵本」の転写過程について

さて、「刈谷市立図書館蔵本」はどのような転写過程を経て成ったものであろうか。

仮説をたてる前に条件を次のようにまとめてみる。

（条件）

一、校異表の数字により、「温故堂文庫蔵本」に比べ「竹圓房本」の方が「刈谷市立図書館蔵本」と親密な関係にあるものと思われる。

二、「刈谷市立図書館蔵本」の四冊第四五葉表ならびに「四句偈」、「摺鼓」、「泗州」の注文は、その筆跡から村上忠順の書き入れによるものと思われ、もともとは白紙のままであったものと考えられる。

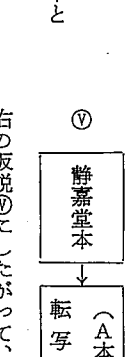
以上の二つの条件より次のように見通しをたてることができる。

（見通し）

「刈谷市立図書館蔵本」は「温故堂文庫旧蔵本」に比べ、「竹圓房本」の特色を多く引き継いでいる。

前章で考えた「静嘉堂文庫蔵本」と新写本との関係を含め、見通しにしたがって仮説をたてると次のようになる。

Ⓥ



右の仮説Ⓥにしたがって、校異表の〔各本との関係〕の項目について検証してみることにする。

表C

	各本との関係			各本との関係			各本との関係	
A	静と温と竹と一致し、が一致する	◎	E	静と温と竹と一致し、と刈と一致する	◎	E′	温と竹と一致し、静と刈と相違する	△
B	静と竹と刈と一致し、が一致する	◎	F	静と竹と一致し、温と刈と一致する	×	I′	温と刈と一致し、静と竹と相違する	×
C	静と温と刈と一致し、が一致する	×	E′	静と温と一致し、竹と刈と相違する	◎	J′	竹と刈と一致し、静と温と相違する	◎
D	温と竹と刈と一致し、が一致する	◎	F′	静と竹と一致し、温と刈と相違する	△			

表中の◎印は仮説Ⓥによって説明できるもの、◬印は疑問が残るもの、×印は説明できないものを示す。◬印と×印の要約を次に示めす。

表D

静	ⓒ㊳俗用之	㊴七生	㊵祠部	㊶天文	㊷于依酒名	㊸八百十四季也
温	俗用之	七生	祠部	天文	于依酒名	八百十四年也
竹	俗田之	士生	桐部	天神	予依酒名	（なし）
刈	俗用之	七生	祠部	天文	于依酒名	八百十四年也
静	㊹山谷殿	㊺両降	㊻豕〻一季	㊼徹底	㊽八百八十二季也	㊾槐亥歳
温	山谷殿	両降	象〻一年	｜底	八百八十二年也	槐亥歳
竹	山名殿	雨降	象三年	｜庢	八百九十二年也	亥歳
刈	山谷殿	両降	象〻一年	｜底	八百八十二年也	槐亥歳
静	㊿白鳳廿二	51蜯虭	52銕緑花	Ⓕ32萬ゝ	㉟涯使不｜｜	㊲雑紙
温	白鳳廿二	蜯虭	銕緑花	萬	渥使不｜｜	｜仾
竹	白鳳十二	虭蜯	銕線花	萬々	涯使不｜｜	｜紙
刈	白鳳廿二	蜯虭	銕緑花	萬	渥使不｜｜	｜仾
静	Ⓕ㉝禁裡也	㉞塹ゝ山｜ゝ｜史	㊱天禄…百四十七季	Ⓗ ●佛●子●文●殊●頭●麦●衆●疑	八人火名	四千八百廿人…四千八百卅四
温	禁腥也	塹ゝ山｜ゝ｜定	文禄…百四十七季	●佛○子○文●珠●顚○受○衆●疑	八人大名	四千八百廿人…四千八百廿四
竹	禁裡也	塹ゝ山｜ゝ｜史	天禄…百四十七季	●佛○子○文●珠●頂○受○衆●疑	八人大名	四千八百廿人…四千八百廿四
刈	禁裎也	塹ゝ山｜ゝ｜夫	天禄…苔四十七季	●佛○子○文●珠●顛○受○衆●鋌	八人人名	四十八百廿人…四千八百廿四
静	律宗（自四河含出也）	考妣生由父母死日	客征風也異名	餘筈（矢之符）	福徳日（〓酉）	厚地（五万九十八百七十九）
温	律宗（自四阿舎出也）	考妣生日父母死日	客征風也星也	餘筈（矢之篦）	福徳日（〓酉）	厚地（五万九千八百七十九）
竹	律宗（自四阿舎出也）	考妣生日父母死日	客征風也星也	餘筈（矢之篦）	福徳日（〓酉）	厚地（五万九千八百七十九）
刈	律宗（自四河舎出也）	考妣生田…母死日	客征	餘筈（矢之笛）	福徳日（〓酉）	厚地（五百九千八百七十九）
静	轉讀	菊月九月	七曜（水｜本｜金）	木賊木ノ子	Ⓘ'⑲同上	㉒華
温	｜懐	菊月	七曜（水｜木｜金）	木賊	同三	草茎

竹	―懐	菊月	七曜（水　木―金）	木賊	同	華莖
刈	―壊	蒭月	七曜（水―不―金）	不賊	同三	菫莖
静	㉓文武	㉔―目	㉕五十歳也	㉖金姓水水姓木	㉗木丸殿	
温	又武	―口	五十歳也（注文欠く）	金―水火―木土―金	木凡殿	
竹	天武	（なし）	十歳也（注文欠く）	土―金金―水水	木九殿	
刈	又武	―口	五十歳也（注文欠く）	金―水火―木土―金	木凡殿	

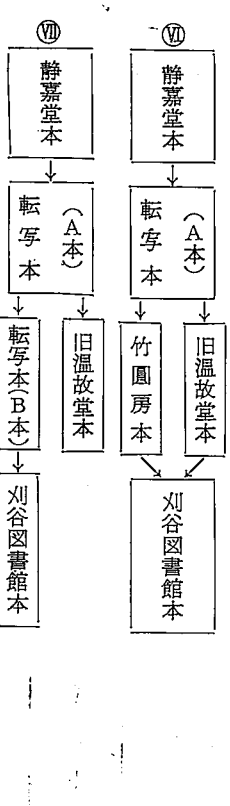
右のF′、H′についての多くは誤写、脱字の類として考えられ、仮説Ⅴに矛盾するものではないが、C、FおよびI′についてみてみると、「刈谷市立図書館蔵本」には、「竹圓房本」に表われない、「静嘉堂文庫蔵本」もしくは「温故堂文庫旧蔵本」の痕跡を残していると思われる例がある。この点で仮説Ⅴは修正せざるをえない。

したがって、新らたな仮説を考える前にその見通しを次のように修正することができる。

（見通し）

「刈谷市立図書館蔵本」は、「竹圓房本」の体裁を継承し、「竹圓房本」に存在しない「静嘉堂文庫蔵本」、「温故堂文庫旧蔵本」の語文を有する。

このような見通しをふまえると、考えられる仮説は次の二つである。



仮説Ⅵにしたがうと、「刈谷市立図書館蔵本」における「温故堂文庫旧蔵本」の痕跡についての矛盾は全部解決される。

しかし、本説の欠点は、「竹圓房」の体裁（白紙・注文の欠）をどのようにして「刈谷市立図書館蔵本」が継承したのかにある。

次に仮説Ⅶはどうであろうか。

仮説Ⅵにしたがうと、先の「刈谷市立図書館蔵本」における矛盾の多くは解決される。

しかし、用例㉜、㉝、㉟、㊲の「竹圓房本」の「々」、「裡」、「遲」、「紙」は転写本（B本）よりの誤写（B本では、それぞれ『萬』、『禁旌』、『渥使――』、『雑低』となっていたものと想定する）としながらも、新写本の共通祖本の「静嘉堂文庫蔵本」の本文と一致する。これが仮説Ⅶの欠点となる。

そこで、両説の欠点を比較すると、仮説Ⅵの場合、偶然の入るべき余地がなく、欠点として決定的なものである。仮説Ⅶの欠点は、筆者が転写する過程で誤りを正すことは十分考えられることであって、欠点としては決定的なものではない。

また、仮説　の、「静嘉堂文庫蔵本」と「温故堂文庫旧蔵本」との転写の過程に転写本二本を、「静嘉堂文庫蔵本」と「竹圓房本」との転写の過程に転写本一本を設定する説は、校異表の〔「温故堂文庫旧蔵本」は「静嘉堂文庫蔵本」に近く、「竹圓房本」は「刈谷市立図書館蔵本」に近かいものであろうとする〕数字によって説得力をもつものとなる。

このようにして、仮説Ⅶはあらゆる事実に対して蓋然性の高いものとなる。

そして、次のような例「御子」、「行子」、「郷子」も仮説Ⅶによって説明できることを付言しておきたい。

㊺
寶篋院（ホウケウ）　御名乗義詮権大納言尊氏御子…（静）
宝篋院（ホウケウ）　御名乗義詮権大納言尊氏行子……（温）
宝篋院（ホウケウ）　御名乗義経権大納言尊氏郷子…（竹）
宝篋院　御名乗義経権大納言尊氏行子……（刈）

(六)　「刈谷市立図書館蔵本」と村上忠順の書きれについて

「刈谷市立図書館蔵本」の四巻末の識語によって、本書の書き入れは村上忠順のものであり、本書は「温故堂文庫旧蔵本」の転写本であると考えられている。そこで、忠順の書き入れと「温故堂文庫旧蔵本」との関係をみてみよう。

㊻

一切経五千四十八巻也欽明天王僧要元乙未自太唐
渡之至天文十六年丁未八百十三年也（静・竹）

一切経〔此分注年数等未詳〕五千四十八巻也……（温）
渡之至天文……

一切経〔此分注不詳〕五千四十八巻也……（刈）
渡之至天文……

㊼

左大臣皇極女帝常色元丁未始定左右大臣唐名
左府左槐左茉相至天文十七戊申八百九十二季也（静・竹）

左大臣〔孝徳帝即位大化三丁未ノ年ヲ常色元トスト応安年代記ニミユ〕
皇極女帝常色元丁未……（温）
左府左槐……

左大臣〔斉明応安年代記孝徳帝大化三丁未斉明帝即位常色ト改元〕
皇極女帝常色元丁未……（刈）
左府左槐……

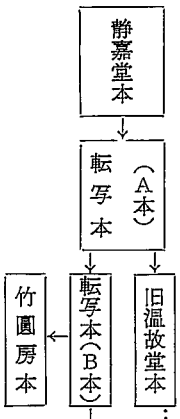
㊽

俱行者賀茂俱公民也……（静・温）
俱行者賀茂俱土民也……（竹）
俱行者賀茂〔公民〕土民也……（刈）

〔　〕内は書きれであることを示す。

右の例をみると、「刈谷市立図書館蔵本」の忠順の書き入れは、「温故堂文庫旧蔵本」の書き入れを中心に加筆したのではないかと思われる。用例㊽の「刈谷市立図書館蔵本」の「俱」の場合、本文は「竹圓房本」の「土民」に、書き入れは「温故堂文庫旧蔵本」の「公民」に合致しているのである。

したがって、前章の結論と本章の結論とを含め、図式化すると次のようになる。



本稿では三本のみの新写本でその系譜を考えたため、さぞかし、誤りの多いものであろと思われる。先学諸賢の御教示をお願い申し上げる。

注1　遠藤和夫「『運歩色葉集』の一異本――西来寺蔵　天正十五年本――」（成城大学短期大学部紀要第八号）一頁。

注2　拙稿「『運歩色葉集』における年代表記について」（長野県短期大学紀要37号）。

注3　川瀬一馬『古辞書の研究』八九三頁。

注4　同　八九四頁。

注5　米山寅太郎『運歩色葉集』（序に代えて）。

注6　根上剛士『中世古辞書四種研究並びに総合索引』（下影印篇）二三頁。

注7　川瀬一馬『古辞書の研究』八九四頁。

注8　川瀬氏は塙本（温故堂文庫旧蔵本）の国尽の位置を第一冊末とされているが、今回の調査によると、二冊第二四葉～第三十葉に位置していることがわかった。

なお、運歩色葉集の底本としては、「静嘉堂文庫蔵本」、「温故堂文庫旧蔵本」、「竹圓房本」については写真複製を使用し、「刈谷市立図書館蔵本」についてはゼロックスを使用した。

（付記）

『古辞書の研究』のなかに引かれている「水戸彰考館蔵天正十五年奥書本」は、第二次世界大戦の戦災によって、焼失したという。